

## 日常の裂けめより

事務局からいただいたテーマは、表題の通りです。

「日常の裂けめ」——日常の中でふと姿を見せた、日常でないもの。非日常。名前のないもの。——この、名前のない、得体の知れないものに、新しい名(言葉)を与えようとするのが、詩作行為ということだろうと思います。

### 一、大きな裂けめ、小さな裂けめ

大きな、小さなは、必ずしも正確な言い方ではないかもしれませんが、まずこのへんから考えてみましょう。

#### 1. 政治や社会の大きな変動からくる、いわば歴史的、思想的な裂けめ。

例としてあげるなら、アウシュヴィッツ、ヒロシマ・ナガサキ。ベルリンの壁の崩壊。9・11テロなどが、これにあたるでしょう。特に第二次世界大戦中のできごとは、これが人間のすることか、と思われるような、恐ろしい経験でした。近代という時代の根底にあった、人間への信頼を、大きく揺るがすこととなりました。アウシュヴィッツの後では、軽々

しく詩を書くことは許されないと、いった言葉もあるくらいです。私たちはこれを通してきています。しかし、これを乗り越えているとは言えません。また同じようなことを繰り返さないと限りません。私たちは詩を書くとき、このことを胸のかたすみに置いておきたいと思います。

9・11テロ。これも、世界を驚かせるできごとでした。大きな裂けめのようにわたしには思われます。これがいったい何であったのか、分かるにはまだ多くの歳月が必要でしょう。

#### 2. 突然外部からやってくる、私たちの日常を直接おびやかすような裂けめ。

例としてあげるなら、阪神淡路大震災。身近な人の死。(場合によっては)恋なども。先の震災のときには、大阪や神戸の詩人たちが、文字通りの裂けめを表現しましたね。また身近な人の死は、いつ、どこからやってくるかわかりません。そのとき、詩を書くことで、その裂けめの痛みを耐えようとするのです。

#### 3. 日常の中でふと訪れる、それを「裂けめ」として受けとめる用意がなければ気付か

ないほどの、小さな、しかし切実な裂けめ。

これが、本日のゼミナールのテーマだと、わたしは受けとめます。日常とはいっても、歴史や社会状況と無縁ではありえないわけですが、今回は3に限定して、お話をすすめます。と思います。

## 二、詩が生まれる「時」としての、小さな裂けめ

——短歌を例に

⑦新妻の笑顔に送られ出でくれば／中より鍵を掛ける音する

久松洋一

①君は今小さき水たまりをまたぎしかわが磨く匙のふと暗みたり

河野裕子

二つ並べてみますと、まことに同じような場面で、両方とも、ささやかな日常のできごとと心をとめています。ただ⑦のほうは、出勤していく夫から家に残る妻へ、①は家にいる妻から出勤していく夫へと、思いの方向は対称的です。

家を出たとたん、背後でガチャという鍵の音。新妻に送られる楽しく浮いた気分が、不意に冷めてしまうような。あの音は何だろう——と、引っかかってしまったんですね。愛情の裂けめの予感？ いやいや、そんな、簡単に説明のつくようなものではないでしょう。むしろ新妻は、家庭を守るために鍵をしているわけですから。しかしその合理の音が、なぜかそのとき心に響いた。これから出勤して、職場での自分ひとりの時間が始まる。家では妻だけの時間が始まる。二つの時間に分けてしまった、鍵の音。今まで妻との一体感としてあった時間感覚が、一瞬、実は別々の時間、として意識されたのでしょうか。ここには主体の揺らぎがあるようです。

さて①の短歌は、夫を送り出したあと、朝食の後片付けでもしている場面でしょうか。

スプーンと水たまり、この二つを結びつける直感力。その飛躍した表現に、「君」への思いが出ています。日常世界の「新しい把握の仕方」が、不意にやってきたという感じで、まず作者がびびくりしたのではないのでしょうか。

このように、二つの短歌には、流れていく日常の中で、不意に、何かリアルなものに触れた、その小さなとまどいや驚き、感動が表現されています。「日常の裂けめ」と呼ぶにふさわしい用例だと思われれます。

近代の、いわゆる「大きな物語」（理念）が成立しにくくなった現代、このような小さな裂けめによって日常意識を耕し、「世界」にじかに触れようとすることは、詩作、生活の両面に意義のあることではないでしょうか。

## 三、「裂けめ」は形あるもの（客観）ではなく、一つの心的経験である

——俳句を例に

例えば先の⑦①において、鍵の「音」や匙の「暗み」といったもの自体が、そのまま裂けめではないですね。そこに引っかかる人もいれば、何も感じない人もいるわけですから。

裂けめの経験の例を、いくつか俳句であげてみましょう。

1. ものごとの正体（新しい側面、価値）に気付く。

㊦主曰くこのわがままのたんぽぽよ

辻 桃子

ものごと（存在、世界）は、私たちの日常語をいつも、はみ出そう、はみ出そうとしています。例えば日常語で、「ヒマワリのように明るい少女」とか、「孫がかわいい」とか、「白牡丹が咲いている」とか言います。しかし、少女は「ヒマワリのように」「明るい」をいつでもはみ出そうとするし、時には「少女」という言葉をはみ出して、とても「少女」とは思えないような言動をすることだってあります。孫も、「かわいい」という言葉にいつも閉じ込められているわけではありません。後で引用しますが、「白牡丹といふといへども紅ほのか」という句があります。この白牡丹は、「白牡丹」という言葉をはみ出していますね。となると、きのうまでクスノキだったものが、きょうも同じクスノキだとは限らない、ということですよ。きょうまで「わたし」だったものが、あすも同じ「わたし」であるかどうか、確証はありません。

このように、言葉をはみ出そうとするところが、存在、世界のまさに生きている部分で、そのことに気付いたとまどいや驚き、裂けめの経験ということになりましょう。野村喜和夫は著書『現代詩作マニュアル』の中で、「詩とは言葉による世界の捉え直し、あるいは再構成である。そしてそれは驚きを、エロスをさえ伴う」と述べていますが、このはみ出した部分を新しい言葉で捉え直すのが詩だ、ということですよ。ただ、野村氏の場合、「日常の裂けめ」という発想とは少し違いかもしれませんが。

俳句㊧ですが、タンポポは生命力があり、「踏まれても踏まれても、負けずに強く生きる」というふうには、しばしば道徳的な比喻としても使われます。その、強く生きる、はびこる、という側面を、「わがまま」という逆イメージの言葉で捉え直しています。そして、タンポポの産みの親さえ苦笑しながら見守っているという、ドラマ性のあるおもしろい組み立てになっていますね。

## 2. 隠された関係性の発見（構築）。

㊨雪夜子は泣く父母よりはるかなもの呼び

加藤楸邨

泣く子。抱き上げて、おむつを替えても、ミルクを飲ませようとしても、暖めても、どうしても泣きやめない子。ひよつとして、お父さんお母さんよりもっとかなたの、ほんとうのお父さんお母さんに向かって、呼びつづけているのではなからうか。降ってくる「雪」と、「はるかなもの」がひびき合っています。

この直感、どこからくるのでしょうか。単なる思いつき、でたらの発想ではなく、作者の内面に必然性を持つもの、また普遍性をもつものでしょう。そうでなければ、リアリティはできません。先にあげた短歌㊩も、この部類に属するものです。

## 3. 存在の不思議にうたれる。

㊯つきつめてゆくと愛かなてんと虫

時実新子

日常は流れていきます。ふと立ち止まって、目の前のごとを眺めてみると、そこに静

かに、なぜここに、こんなものがあるのかという、謎の形で、裂けめが現われる。リアルな世界が姿を現わします。㊦は、その不思議を「愛」という言葉で表現しています。ここでは、喜びも、悲しみも、みな同義語です。

#### 4. 新鮮な思念のひらめき。

いい作品には、必ず新鮮な思念が、新しい言葉のかたちで光っています。

#### 5. 思いがけない夢の衝撃。

詩人に限らず、多くの芸術家が関心を抱きつづけている問題ですね。「わたし」ではないわたしの声。これは、「わたしの裂けめ」、とでも言ったらいいようなものではないでしょうか。

#### 6. もの言わぬものたちの声を聞く、など。

死者の声をはじめとして、森羅万象に耳を傾けるということは、太古における詩の発生、詩の原理ともかわる、興味深いテーマを含んでいるように思われます。いわゆる「擬人法」が、単なる「技法」を超えて、一種のアニミズムの世界に踏み込んだ時、そこに新しい詩が立ち上がることでしよう。

以上、日常における小さな裂けめの種々相について、お話ししました。裂けめとは、結局、「わたし」という存在の揺らぎということでしょう。「わたし」の中を流れる幾すじもの時間、その束の中の一つ、あるいは数本が、何かのきっかけで、揺らいだり、ねじれたり、つま

ずいたり、とつぜん途切れたりすることだと思われれます。そして、これまでの自分の持ち前の言葉だけでは、説明のつかない状態になる、というわけです。

このような裂けめの経験が、極端になり、日常生活とのバランスを欠くときは、精神上の恐怖、あるいは祝祭につながっていくのではないのでしょうか。

### 四、裂けめ（非日常）を呼び寄せるために

1. 日常（世界）は言葉の外皮で保護されている。輪郭を持たない、得体の知れないさまざまな存在は、言葉が与えられることによって、説明のつくもの、納得のいくものとして鎮められ、固定化されている。したがって裂けめとは、言葉の裂けめである。言葉のズレであり、飛躍であり、慣用表現からの逸脱である。

㊦ポストまで歩けば二分走れば春

鎌倉佐弓

現実に対して、言葉のほうをほんの少し先行させ、潜在する裂けめを言葉でさぐっていく、言葉で裂けめを整えていく、ということですね。例句㊦で、「歩けば二分」と「走れば春」のあいだに、言葉のズレというか、意味の脱臼というか、慣用的な言い方を逸脱した、小さな裂けめが生じています。そして大切なことは、少しもわざとらしさ、うそっぽさがないということ。走れば春」というのは、走ることによって風を受け、春を感じたということでしょうし、また白い手紙を抱いてポストへ走っていくという、その行動そのも

のが、若さ、つまり春というふうにもとれるわけです。

言葉を先行させるとはいつても、裂けめは基本的には出会うものであって、言葉で勝手にでっち上げるものではないように思われます。先ほど、裂けめを「呼び寄せる」と言ったのは、そういう意味あいです。

2. 日常は「流れていく」(習慣化する)「こと」によって、日常としての安定した姿を保っている。それならば逆に、「立ち止まる」ことによって、裂けめを呼び寄せることができるのではないか。「立ち止まる」とは、言葉によって細かく分節化、固定化された世界を、固定化、分節化を解除する方向で、もう一度問い直すことである。

⊕白牡丹といふといへども紅ほのか

高浜虚子

これは、平たく言えば、先入観、思い込みを取り除く、ということでしょう。具体的に、子供のものの見方から学ぶ、というのもその一つです。子供は、分節化、固定化がすすんでいません。慣用表現がまだでき上がっていません。子供の詩が時に新鮮なのは、そのせいです。画家のピカソも、子供の絵から学んだというようなことを、テレビで言っていました。

これはずっと昔、東京の空がスモッグで覆われていたころの話ですが、都会の子供が田舎へ林間学校に行った時、初めて美しい星空を見て、「ジンマシンが出たようで、気持ちわるい」と言ったとか、新聞に出ていました。私たちには美しい星くずとして見え、星座

の名を知っている人にはさらに秩序ある物語として見える星空を、こともあろうにジンマシンでたとえてしまった。美しい星という固定観念をぶち破った表現、まさに一行の詩といってもいいものです。

これは余談ですが、子供の見方をさらに突きぬけ、さかのぼり、赤ちゃんの意識にまで帰っていったらどうでしょう。そのためにはきびしい瞑想修行が必要でしょうが。ひよつとしたら、仏教の「空」の思想に近ところまで、行きつくかもしれませんね。

ところで、例句⊕ですが、さすが虚子、「白牡丹」に対して、その固定化から自由になっています。自由になっているから、「紅」が見えたのです。

3. 日常のあるがままの視線は、必然的に、闇よりも明るい方へ向かう。お金へ、都市へ、権威権力へ。それなら逆に視線を、弱いもの、小さなものへ。もの言わぬもの、見捨てられていくものへ向けてみる。闇へ向けてみることも、大切だろう。いや、闇にこそほんとうの光がある、と言ったほうが正確かも知れないが。(批評精神といってもいい。)

ここでは三つの項目を申し上げましたが、1、2、3とも、お互いに関連しあっている。ことはもちろんです。要は、私たちの世界が言葉によって成り立っている限り、不動のもの、確固たるものは何一つない、という思いの中にあることです。そして、存在の輝きに対する感受性を養うことでしょう。